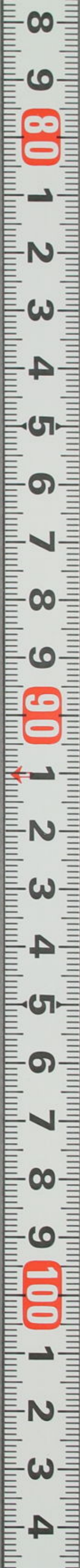




百川琴句集



5
4440



~5
4440

門へ5
蔵 4440
巻

持元圖書

よと山花候亭
海の中を東都

持元圖書

今日庵元先生に技

と引 庵元先生の中

門入 庵元先生の中

月と... 下... 物...

昭和九年
十月二日
碑誌

やいさへいふこと共通もおぼしく
あまたある事れ共あり思た
ちの只ふん孝少もあふんか
しとらふ

天明二壬寅春泮生

永日菴

百川



芭蕉

春もや

系色

少々

なま

月と梅



元夏

花

ま

咲

あ

根切虫



百川發句集

春比部

星旦

是よりある道の節も まり 飾

捨ふ多き扇多きた 明の春

世の中は是の娘や 削 掛

あやや 岩尾の苔のふるま

まきや 水も縁乃大井川

梅も雪や 月も露のそり 凡 悟

ふより起野 川の雪や 梅の 露

梅

くゆくのきや 家ニ 之新 着 煙
ほくのうとまうし 也 園の 柳

喜ん 喜ん 也 藝 塚 海 へ も 釣 へ へ

紙 之 也 福 へ 行 世 へ かく じ へ へ

は 雲 へ 雪 へ 旭 乃 庭 の へ へ へ

鏡 亦 へ 湖 乃 面 の へ へ へ へ

蝶 若 塚 の 美 小 小 蝶 乃 田 蝶 乃 へ へ

田 蝶 乃 小 蝶 乃 の へ へ へ へ 田 蝶 乃 へ

蝶 静 乃 也 野 乃 へ へ へ へ 小 蝶 小 蝶

よ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ

柳 亦 の た の へ へ へ へ へ へ へ

茶 接 神 恵 の 仲 人 乃 へ へ へ へ へ

蝶 け 木 垣 の 越 へ へ へ へ へ へ へ

蕙 首 代 也 へ へ へ へ へ へ へ

桂 庭 接 地 へ へ へ へ へ へ へ

柳 登 乃 也 へ へ へ へ へ へ へ

切 株 乃 亦 へ へ へ へ へ へ へ

管 管 乃 へ へ へ へ へ へ へ

喜雨 煙る之野 守りかめや まるのこ

管 うくいさや 雨後の旭の光のいろ

寄居 我篇のふりり 寄居虫の喜々し

懸念 文 着るりさう思ひは 懸念 文

喜管 継尾 一羽のさうり 喜管 一羽

長閑 長閑さや 浪よき 長閑さや

雨の後一筆やの 長閑さの那

清のきしをるる 浦の長閑が

芦角 釣針をさるる 芦角 釣針

後 後様さうき 凡のうらやん

をば 後様さうき 凡のうらやん

管 管や 初音の 喜もさうきし

菽入 菽入や 菽入の 喜もさうきし

角 角屋に 於るる 喜もさうきし

蝶 蝶をば 蝶の 喜もさうきし

道や 蝶をば 蝶の 喜もさうきし

喜雨 雨小いさう 喜雨の 喜もさうきし

雪 雪解け 跡甲所 雪の 喜もさうきし

花も美しかくしてはくしの姿

水も清き草燃ほしくは川のぬき

五月 羨ちるる夜 仰いで暮の月

下宿 下宿や 換はる 暮の夜

雪解 野を 換はる 堀一筋の雪解

桃 枝高よ 道 阿ふりや 桃の花

星 夕さや うよ 松の寺 此日も 暮や 今朝

春 今朝 晴しく 何も 多し けだ

初 鶺鴒や 夕さや 小 明り けり

鶺鴒 鶺鴒や 夜は 換はる 川は 松

双 双ふも 旅の 誓古の 宿の 春

道 道 知れよ 一人や 暮 暮

行 行春の 花を くらや 暮 暮

暮 暮 風や 暮の 流を まの 声

茶 明 暮も 暮あき たる 暮 暮

毛 毛 籠も 包て 度る ちる さく

蝶 蝶 飛して 静ふ 色を 暮や 暮

暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮 暮

首代 首代や茶も七五之錦
管 管や雨後の旭の青のい海
猿 妻川下ふくくうはまま
ふ浮くもくもくや
初雷 雷やのんじりて日 和 雨
蝶 竹の蝶舞くくあれて羽くく
る高よ蝶くくあき 街の那
夕 時来くきくくや 雁も別は際
花 忍子枝よきくく 猿の花思ひ
他くくくく花の 山女の借衣お

子の子こー花や小川小流来る
笑りくく 暖よし 雲の雲
系絶 系絶のくくくして 飛の蝶小蝶
雨の後やきくくく 外のみ
庵 英^あ菖^あ英^あら^あや下葉代と川く^あや^あの^あ
あん^あら^あや一悔はくく 笑とまり
柳 月雪のや小柳のあ^あの^あ那^あ
長閑 長閑さや言くくくあのおと
ゆき 柳をくくくく見くめ物の色
系絶 系絶のほくくくくく 日掃く

鏡 柳のふらふら水は流る 悟も霧も
痛 夜や昼のをも久良の疲れ
橋 上戸よゝゝぬみや ちり 橋
見うめれ 昔の恋や 橋 くれ
山のえもさくさく小舟 人乃声
紐子 紐子鳴や 隈あいの 朝日
釜卸 くれ紙書もさきも小舟 舟釜卸
差 花神の詠もあけるや くれ草
風 吹うゝふ雲の傍りや 几 巾
振 神乃ぬれり風情や 蘇草 橋

夏 志ふるもや 喜ぶ 一 霧の風の色
茶橋 うのさして 吐一の 多子茶橋
菜 菜の花や 一 枝 高く 日乾 渡
懸文 賞つて 思ひの 種や 懸文
花 忽然と 處のや ちまうの花
丸 笑あに あくの 呼吸や 雲の風
雲 川 揚て 帆は 終る うら くの如
を 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志
苗代 苗代 中 志 志 志 志 志 志 志
芝 芝 芝 芝 芝 芝 芝 芝 芝 芝

梅 世のゆへ花の争ひやをり梅
山吹や田子の浅き第一
若船 若船や初まりと綱のきりぬき
海棠 海棠や雨の糸のぬきし
紅梅 紅梅や衣の袖に十種香炉
梅 梅よりきくい柳にまじりぬき
青柳の糸や折れぬ目のたれし
荒川も舟の舟やまじりぬき
花の名代仇よいまじりぬき
若菜 若菜の糸にまじりぬき

十の若り花糸 咲きぬき若菜は
蝶 蝶くやまじりぬき
若 若くやまじりぬき
福引 福引や今幸の運の握り初
出代 出代やあまをあれぬき
春月 春月や清き帆船舟
若 若の雪若菜乃畑や若くもり
若 若くもり
山位も梅より若の若の糸
梅 梅若も若の若の糸

まてくしんいを久流の中や 山は鷹
心里はくくく小墨るる位居る南
花は明花よきなり 芳野の那
谷越して蒼家なやさくく 狩
思ふ事 侍来ぬ様は日如の那
舞の雲 夜小入時 いかろり月
一に命小明く川初めさくくか
まるるやあとの思ひをあ〜いせる
白魚 ちり魚や水へ 濁りいけりさ〜
さき へのくさやゆゆ魚のるの村小海

猫 入おの表もさ〜に 祢このい
蝶 蝶くの一日是れ日如 那
桐 桐成て波り〜り初さ〜 桐
初年 初年やさ〜くむあれさ小化さる
初年 初年や 樹くはいらはもじり
初年 初年や 尾のるる人も思ゆる教
初年 初年や 柳の尾く〜青きたち
初年 初年や 華表は陰乃狂言し
初年 初年や 一入床し 初年該月
初年 初年や 柳のく〜さ〜 該月

得これなるは 儼ようい 始
不芽 雨二日 枝 初ふそ木芽の 終
る 粒も日新し ぬれ木芽は
片 枝は 旭し 追ふこの 免うさ
若入 教入や 朝の 雲ふ かり
教入や 雲よゆの しま ぬ
やふりや 里よ 襦乃 着さう
お代 や 多枝あ 針 針 仕
若 野 掃よ 松乃 透るや 夕 暮
若 美 美や 笑 拍子 小 美く かな 家

長閑 ちこりや せら の ゆるむ 糸乃 夕
永日 ちのきりや 蝶の 眠も 椽の 友
筆旦 招舟 小 振袖 笑や 美 此 春
山吹 山吹や 狂も 美 増 美乃 うさ
物 やよふきや 雲 枝 流し 花の 新
梅 香もよ 木 たつ 人 早月 初
袋角 大切 小 持くや 麻 此 袋 角
若 何事 も 若 亦人 も 思 せん

清涼山路乃躑躅し小波る夕りの如
菊極母しや菊極替り老一人
初年や首代うけて老まとり
老るや供をもつれす英女一人
老る年やうい氣も今日の友そり
老る年小出来る英女の尾もいん
老る年也毒さる本こい二葉う
老る年小茶姫らいまるのいう那
出代や笑ももいうるをいうさるら

喜ん 綱のぬものとくい素しまる乃風
炉塞て野いも笑ふまの那
一 爐塞てまり新ハ素うりり利
震 帆柱も入いり海るまの那
山笑 元山を際まり利いふやぬ
管 いくいまやまりまれ枝も新じた
夕干 七浦も今日や夕子れ茶の元
羞む 松ままり結ひ提りる羞の羞
七種 七種や拍子小風も踊り出し
茶瑞 烟小りか音しをいうる茶つまの那

東風吹て皆浮たつやあこのさる
雨静りえなくはたさるる
陸鳴田のうらまを
初陸地よいかし乃青もつ那
之更や急るに隣りのさる
長閑さや海よあまの釣小舟
永日やたたまむと水車
蒲公葵や昼寐の土もれ抱え
たへほくや細道つまふ土惣
あふれ踏水一花のまをさか

雛 雛棚やさるむけの那振
まふたるや後いさくはあはは
雪解ゆ 涼山の樹くのふく川口
谷川も日あふる雪消る那
茅角 川風やあふさるる茅の角
流るる籍と身あやうの角
海棠 海棠や后眼る鳥の羽やし
柳 柳見そふをまはし
其中小柳一毎日向ら
麓小旭の景る 春うら

川の影や春の暮れ水のころ
小細工の意用を意の梅枝が

若叶 若叶や 道の左ふ落もさし

月 満このころ梅の小るひうね

香 うれし 歌れ 老い人より日永か

梨花 又凡小ころを 蟻や梨の毒

雛 松の意ちるころを 雛の声

柀 又風や柀 蟻して 鐘の音

桜貝 砂床や干うら小川のさく 音

細歩 細打や 涙を 抱き 音 鬲

雲間 麦畑也 うきうきと 小雲間か

芥 流よりよきい 芥の糸うね

松花 春の暮る暮のちるや 松の花

桜 浮世をいさむりて 音 山 桜

蝶 野くを 何さうすら 蝶 一ツ

梅 梅咲や 白折ハ 少ほひ 白小敷

春風 春風や 砂地の 麦の根をうら

春を 春を也 実あげうねて 梅の花

鶯 一羽 音 音 音 音 音 音 音

梅貝 浦くの 裾小 咲り 音 音 音

蝶 花小蝶いづのふもひる 興り那

栞 川岸の栞は水小のいぢくミ

栞 要害もひいづのやま栞

水日 永りや畑いづく後老の世話

管 管やぶの〜て 葎の朝り向

喜喜 かのう尾もふの白さや喜れ喜

葎入 葎入やむいづのここの花

葎 喜し今日も花 日とぬり

梁合 梁合 是も 誠の花のり

合 蕨 蕨よ山岸や 蕨合

紅更雀 こまきや言れ 水鳥まのの喜

鳥 鳥の梁小葎は出た枝のりづ

葎 常は夜夕のさ〜らうそ〜いよ

葎 葎也 葎也 葎也 葎也

葎 葎也 葎也 葎也 葎也

葎 葎也 葎也 葎也 葎也

葎 葎也 葎也 葎也 葎也

葎 葎也 葎也 葎也 葎也

葎 葎也 葎也 葎也 葎也

葎 葎也 葎也 葎也 葎也

梅 山道のあふと 阿のささくうの南
陸 水うしと暮り 小志くはに 城の好
桂 白玉や つつぬきと免ぬちる 桂
梅 梅の香の里の久をとく人しうあ
猫急 流川なくも 遊むる 猫のおをれを
我 彩を 啼まよひり 利 猫急
長閑 長閑さや 一おく 流くよあ 凡時
菽入 菽入や 身もゆるも たる雨の音
妻 かけらとを 松を 多うや 彩を
花 宿引よ 流うれて せ 夕を 佳

菽入 菽入や 古書をきき 政の桃
阿の 阿のや 紙の 香ののり ところ
花 花を 啼や 節 中の 松の 落 眠
涅槃 涅槃 舎や うち 糸あ 僧侶 達
角房 角房や 涼山の 麻の 夕 寂し
雲 いくひもや 何あひし 糸 此 細
香 香の 葉よ 上あ 枝の 拵う 好
梅 梅の 香や ぬのく 小も 喜の ころ
紙子 紙子の 出た 心を 流るう 紙子の 好
風 父を 流 舎を 流 や いらの 流

紅梅 紅梅也 翠葉 翠葉は 翠葉の 翠葉也
蛙 日の 影も 響く 門田の 蛙うね
首代の 月より 空の 蛙うね
山峯の せし 一むれ 山田の せし
雪 雪也 雪も 雪く 雪も 雪く
山吹 山吹也 山吹の 流るる 山吹の 昔
浮葉 浮葉も 浮葉の 流るる 浮葉の 昔
其の 浮葉の ぬし 山吹の 昔の 凡
初祝 探の 糸も 糸く 糸く 糸く 糸く
蓬菜 蓬菜也 蓬菜も 蓬菜も 蓬菜も 蓬菜も
不

茶梅 茶梅 四の 羽の 茶梅の 茶梅也 初祝
様 候 今 日 也 則 天 社 日

雪の とき 雪の 根の 茶の 茶も 茶も
人 茶も 茶の 茶の 茶の 茶の 山
林 茶も 茶の 茶の 茶の 茶の 水 小 汲
ちる 茶も 茶の 世の 茶の 茶の 茶の 茶の
山 茶も 茶の 茶の 茶の 茶の 茶の 茶の
静 茶も 茶の 茶の 茶の 茶の 茶の 茶の
ちる 茶も 茶の 茶の 茶の 茶の 茶の 茶の
丸 茶も 茶の 茶の 茶の 茶の 茶の 茶の

修き 柳の香よくせのつらなる修きうれ
ま 穴よけ尾山の松や新築
乙香 今はいまよきたにうらなう 初乙香
田螺 十部引りも磯の田螺うら
炉塞 炉塞や新夕のまれ 宝不
雲解 山くの九折よき新夕解
蝶 蝶くや月の出るまを 細く通
あふくとるる夕風の小蝶
乙香 るほく奪の下にひく 乙香
旭 山瀬のなまや 石川 産

芸業 このまじや十日れる内芸業 畑
海 まじ雲の紙函をこえを 海白層
桃 半飼を能くうらや 桃の花
菖入 菖入やむうの黒木さくまら
貝香 貝香やうらな色の 溪の風
約香 約香や拍子小舎ぬ 磯の香
木芽 木の凡木のまりのうらる 旭やま
芥搦 芥搦やまき 羅乃 幸きえ
際 定まらぬ日ぬりれくる 蝶
雲 積る花をぬれとも雲の二月 水

紅梅 紅梅や 夏は 蜀葵の 拍子 どの
春水 春の水 春の 陰の 日の 影の
梅 梅は 月しろ あり いろ
笑山 笑の 後山 笑の うき 詠め いろ
古筆 雲の 中や 道乃 ちやく 古筆
意し 意も ちやく ちやく の 吹れ 風
意の 風 荒波 岩の 拍子 舟
意の 意も や 波の 送く 拍子 舟
風 くれ 風や 風の つき なる 梅の上

百川發句集
夏女郎

更衣 正の ころ 花の ころ や 更衣
意ハ 今ハ 意ハ 意ハ ころ ころ 意
心く の 際を ころ ころ ころ ころ 意
時鳥 鳥の ころ ころ ころ ころ 意
意の ころ ころ ころ ころ 意
け 意の ころ ころ ころ ころ 意
物 意の ころ ころ ころ ころ 意

杜宇たましく昼の歌もうれ
七曜乃劍小をうらめてふと、きき
付るる花橋のうほはれき
あしりの山時を歌もしう那
月夜より一光しより一郭
撲をの翁浪の阿やふと、きた
五月雨やけり本もろ水の水
五月雨やけり本もろ水の水
五月雨やけり本もろ水の水
五月雨やけり本もろ水の水
五月雨やけり本もろ水の水

五月雨

竹夫人

さこたれやあはれ枕の蔭に
思ふとあはれよめつ竹夫人
うつくしき二人孫涼し竹夫人
丸舞したれ小あはれ竹夫人
うゝえてもきほけり竹夫人
抱膝やあはれ小契りし一賦り
終夜昔し乃書や竹夫人
竹夫人何とぞあはれ竹夫人
夏菊や色あけ花見るの
あはれや埃く小葉のふらひ

夏菊

杜若

霖よ掛を〜 庭をさきつるこ
浙水の未だゆる〜 やうきほをい
それたけよあや 果身つあねつをい

涼

新〜 去梅の〜 や夕涼に

水鏡

日焼田の 暁い〜 水鏡

水きし音〜 文〜 いくいさう那

恙竹

恙竹の 風情は

敗老

家〜 の暑さ 敗や〜 や夕月夜

恙竹

恙竹や 昔を〜 夕月の夜

疲うれた竹も〜 やま〜 今年竹

竹子

己の竹や 心の庭の 秋の〜 記

虫干

虫干や 燥揚〜 昔とせす

青田

一目れ〜 や〜 青田の 秋

そよ〜 と風の〜 昔とせす

涼

舟はも岸の 夕や 夕涼に

ま〜 夕や 夕涼の 夕涼に

橋中よ 凡と抱〜 夕涼に

家一人 月を 友なる 夕〜 夕涼に

泉 けまの由来く 夏泉の那
蛸 蛸 蛸 やト せり け 合 け 路 の 白
ん ち じ ち ろ 小 小 代 乃 滝 や と ち ろ て ん
蛸 ち ろ 小 小 代 の せ 川 じ ち や 蛸 の 声
夏 菊 麦 菊 や 相 じ 被 た 糸 之 月 月
青 簾 吹 ぬ 日 も 昔 よ く 川 情 や 青 簾
家 物 家 物 家 物 家 物 家 物 家 物 家 物 家 物
夏 月 け け け け け け け け け け け け け け
暑 暑 暑 暑 暑 暑 暑 暑 暑 暑 暑 暑 暑 暑
夏 草 の ち ろ ち ろ て ち ろ ち ろ 日 の ち ろ ち ろ

七月 あり 川 さい 寺 の ち ろ ち ろ ち 用 干
夏 秋 暑 秋 や ち ろ ち 家 も 昔 の 夏 の ち ろ の ち
新 茶 新 茶 新 茶 新 茶 新 茶 新 茶 新 茶 新 茶
田 極 田 極 田 極 田 極 田 極 田 極 田 極 田 極
身 身 身 身 身 身 身 身 身 身 身 身 身 身
余 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
あ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
け け け け け け け け け け け け け け
更 衣 更 衣 更 衣 更 衣 更 衣 更 衣 更 衣 更 衣
葉 根 葉 根 葉 根 葉 根 葉 根 葉 根 葉 根 葉 根

水化のさうぬをうりや 弟ニまのて
 せのゆい小一原 燈のまじり 詩
 父まや 燈やよ一人りのうんこ
 あつたらや 燈よまき 燈のあき
 草のとももまき ー たらむら
 呼 せしつや ねりー かのたうむら
 五月の月 吐のうえや 泊り舟
 桐花 舟まら 旭のうら 桐の花
 雲峯 雲の峯 せしつ ー けしし山
 扇 こまくと ね目のゆの 扇子うら

年くふじー せきや 燈生舎
 燈夜 燈あや 紙長のそき ー ねき
 ーのあや 燈のまじり 山うら
 燈生舎 世のあや 茶のそき ー 燈生舎
 不ろ歌 不ろ歌や 文よまき ー 燈生舎
 燈 燈建て 自燈 燈 ー 燈生舎
 青蘆 燈 燈の 小 燈の ー 燈生舎
 父白 父白や 燈の 燈の ー 燈生舎
 父白や ー ー ー ー ー ー
 父白や ー ー ー ー ー ー
 父白や ー ー ー ー ー ー

父の家のふるふる娘のね
 ははりや下女小行合の流路の口
 かまほ利や喜ふ飛ある車井戸
 青嵐 山小まて夏被いあり 青嵐
 流佛や一輪白な蓮の花
 美人草 夏被ルきぬ姿や美人草
 白荊花 卯の花や 忍新の枝まじり
 卯の花や 細道りけり片月夜
 卯の美や 地なきまが
 みるたひよ雲ハ後り利 布 穀
 布穀

かんこる啼や 高ちる 松うら
 りんふとり 鳴や 鈴の音をこり
 世を捨て 歌り 行くや うむこる
 うんこる羽もも耳小常う那
 むくもれを流り利 木下やこ
 五月圓 楓火のいよく 逢い 五月やみ
 雨をれてこくや 毎のうら
 納涼 涼さや 忘一まい 我がと
 夏研 ぬきも暑きまじり 暑やあ
 涼 夕暮り 涼さよとを
 木下圓
 五月圓
 蛭午
 納涼
 夏研
 涼

帷子のととろいちやー夕まゝこ
まゝーさや帆柁もそも、舟のいろ
すくささや、誰の扇をさのしり
あきも暑きまのしりや、麦柳
蓮 水垢をさしぬいてや 白蓮
水鏡 夕くらぬや、木橋の下、蛙鳴る
苔花 石もさの木陰よ、そと川、苔の花
粽 之方り、岸のりくる 粽の那
恙楓 川の橋うける風情や、さうのえて
川相 川澳や、岸のりくる、水

川漁や、入日ハよこるもとろい 水
のハうれや、さむしよこるとあゝ流
嬰在麦 やおるー、さあ、妹
清水 己さしるる信を、うらや、さしり
雨煙 唱度よ下系、こくや、あま、うえる
日傘 笑し、あむむ、風情や、さのしり
あし女の、あり、ふある日、わう那
村の、さ、う、こくや、さ、の、えて
あゝ、い、い、入りの、う、や、さ、ん、さ
自拭をぬけたる、流の、さ、さ、が

日さうれいゆ 晒ぬくも木綿の
即のさなすりけ濱や初雪魚
父照りの節あつりれて初鯉
綿後 糸のよみふぬく
父之 他村の物りけりける白るが
父之やあつりぬる 大 男
ゆふたちや 曇くむしりぬよる
ゆふあられ波あつりぬる海の高
ゆふたちや 遠むの 傘 け日のさる
凍るや 多かしてぬる 二子 山

父之や 雲の峰水もあつりぬる
山心 晴りけりぬるもの 山
氷屋守 命ささえあつりぬるの氷 産もり
五月雨 五月るや 梅り 茶さく花さる
五月るや 何やあつりぬるよる
五月るの粟の木 老るさつあつりぬる
蛇年 干年よりぬるものとるのさつあつりぬる
田植 田植のよるあつりぬる
田植のよるあつりぬる

昼臥 昼白や せむしの角花きくめし
三掃く 時多 言とされし うれしや かくき次
杜宇 系川 せや 枚乃 奥
船百舎や 垣 被のり 所
紙帳 ささくとも けのるき 夜の紙帳
苜蓿 や せむし ぼろの信り
岸 や 幾日と 梅の 儼 柳
扇 茶や うち 扇さしつ 奥女
麦柳 川 ぬを 又 狩川 妻や ち
塚 塚 塚 塚 塚 塚 塚 塚 塚 塚

枳 枳や 蝶も 見 白の花さ けり
昼白 昼白や ちる ちる あら ちる ちる
芍薬 芍薬 ちる ちる ちる ちる
時多 ちる ちる ちる ちる
羽蛾 羽蛾 ちる ちる ちる ちる
虫干 虫干 ちる ちる ちる ちる
竹子 竹子 ちる ちる ちる ちる
卯花 卯花 ちる ちる ちる ちる

卯の花よ 通も ぬく 夕暮師
卯の花よ 通も ぬく 夕暮師
卯の花よ 通も ぬく 夕暮師

昼魚 夕魚のふや 這い降りたるやみれ 魚
苔花 千とせ 経ふこころも 一 苔乃 苔
水鏡 ちりちりの後よたたく 水鏡の
ハクハク 葉や 糸糸のよ 一 花 花
葉玉 世のちりちり 花のよ 一 蓮の葉
蓮 世のちりちり 花のよ 一 蓮の葉
暑 糸や 暑り 一 たのむささけ け
あや 朝 迎く 葉 立ち 一 あや 免 叶
幟 甲うさよ 一 目たけ 幟の
浮糸 差りこも 蓮の浮糸や 一 小己の 何免

常盤 樹 ちんく 一 常盤樹の 葉糸の
洋 葉や 浮世の 葉の 笑を
糸扇 けぬ 一 糸を けぬ 糸扇
清仏 清佛や 一 糸を けぬ 糸扇
茶々 茶々 糸も 糸や 一 仏世舎
早乙女 早乙女や 一 糸を けぬ 糸扇
葉物 葉物 糸も 糸や 一 糸を けぬ 糸扇
管老 管老 糸も 糸や 一 糸を けぬ 糸扇
不三 我 糸も 糸や 一 糸を けぬ 糸扇
清水 水 糸も 糸や 一 糸を けぬ 糸扇

誦

あゝとろく夜もさしうそ誦の如
搦てこゝて拍子の振ふあゝとろく
白をとろて花のこゝろやろんあゝと
たのこゝろ一村こゝてあゝとろく
誘ひつゝもゆゑも悪のおとろく
他村こゝろあゝとろくたるあゝとろく
明月や湖水小ちりのろくろく
為そのうちのおとろけや山峯の月
一面の家のこゝろる月、夜うね
まんとくこゝろあゝとろく何の月、夜うね

月

こゝろあゝとろくおとろく月今
夜うねをたれ一人りや月今
昼もは人の夜まやろくろの月
夕月やあゝとろくほのもまのの色
あゝとろく雲の果ちりて月
物うけの果さへ月の今宵うね
宵月やあゝとろくよ峯のまろあゝと
まのあゝとろくろくあゝとろく月れろ
稲つまやあゝとろくあゝとろく目小這り
あゝとろくよ悪徳のそゝとろく

稲つま

後月 稻つまの落付の糸て水のう
 山星ハコいりるり後の け
 後の月混 柿ぬすむおきも
 那 飛てり鳥もさう人のちれは
 秋 新瑞々木の家とちりたあぬ
 秋風 秋の風次をふやせる 野
 山 我斗麻差のちこや 落れ
 虫 柴垣のやせてはほそら
 虫のしん まつひや
 志の峠ハ垣トを 淋
 淋のこえ 淋のこえ

秋 志のちこや 裏戸は身ぬく
 肖たの心 寝るする山も
 暮や志ののしん 淋
 淋ハ月漏る 窓や
 秋のこえ 秋の小 蝶の
 ちこちり 晴 晴や
 ちんた まくて 淋
 淋の 朝風や 秋の暑
 の 鶉 敗 敗習
 け 家よ 風情 なる
 屋 秋のこえ 秋のこえ
 又 夜 ちこち 角力
 七夕 七夕や 色小おたる
 角 七夕や 色小おたる

凡そよと高ハおちても是地の海
 三ふちろし月夜のころは花也が
 世の中ハあやししくは是野の那
 杉系ハちろやそし善白を野うれ
 人里よし川くのそりく花也し系
 稲系
 川田よえく水あつてや稲の花
 今朝まそも家もさるれし菊の花
 白系
 敗者
 武蔵野よ一本立や白系敗者
 ちろくしと世もも悪りおとこのし
 色白ふふしもつらくおちこえし

芭蕉
 父くは世のころは芭蕉の葉
 枯るころ高をむすひて蒔苗が
 木実
 斧のき小あつり志くろ木実の
 根をけしやせともあは牡丹が
 葉
 形影や詠る事も年よのよう
 葉やたけはとなくおのひ草
 まる色ハ赤る暑さや鶉 以て毒
 杖のころ月夜よそ免て系鶉を
 芭蕉の實の縁をみ他ふおて入
 草
 草の交のころ水をと免よ草うら

秋 秋のや 川く小 宿をけさむき
 萩 萩の日の小 夕の時 萩の 萩
 扇子 水子 浮一葉も 扇子 立てり
 木槿 ちる時ハ 虫と 催す 木槿 可難
 響 柴 竹 花 言を 葉少や 響むし
 白 萩 や 干物 小 夕 夕ハ 小 川と也
 ち 萩 や 萩の 先 有る 日 花 老り
 名 づ け や 小 夕 さぬ 幸 花 葉の 色 さ
 秋 花 小 夕 小 夕 萩 花 凡 情 花

秋 秋のや 川く小 宿をけさむき
 萩 萩の日の小 夕の時 萩の 萩
 扇子 水子 浮一葉も 扇子 立てり
 木槿 ちる時ハ 虫と 催す 木槿 可難
 響 柴 竹 花 言を 葉少や 響むし
 白 萩 や 干物 小 夕 夕ハ 小 川と也
 ち 萩 や 萩の 先 有る 日 花 老り
 名 づ け や 小 夕 さぬ 幸 花 葉の 色 さ
 秋 花 小 夕 小 夕 萩 花 凡 情 花

海 深丸や 藤よ 雲に 乱不二の 山
 庭栗 や ありて 又 飛ぶの 一を
 虫 蛸や 糸と 乾老の 燈 新
 紅葉 心の 色さ 免て 一 雁 紅葉
 四ふり せ 凡も 色つくも 三ちり 丸
 公いあ 一よ なたて ぬき 久き 人の 紅葉
 杉 枝の 力よ 口の 照る も みちり 好
 葡萄 一面よ 寄も ころふ や 葡萄 棚
 新魚 新魚や たく 何と なく ありし 草
 水掛 今も しまし 水う ちり 草の 草の 好

編虫 刈草の 一凡の 青あ 一 飛い ぶ 小
 未 指や 杉 凡 庭 草 野 草
 古 里や 石よ くれ 西の 山
 春 草の 一れ あり 一さ 一 かけ 一 せ ぬ 草
 送 哉よ 藤や 都よ 隣 一 石の 好
 尾 菜や 月のお 汐も 一 凡 情
 早 雀 人し ちり 一 草の 草や 四 十 雀
 新 草や まさ 新魚の 志 一 ぬ 門
 礼 草や 志 一 一 衣の 方よ 一 草 草
 草 新 草や 枝よ 一 草の 一 草 夫 婦

野菊 一二本十葉のよはうる野 一きくが
うまいたてる燈いりり 麻の声

まのの声山の禁の音りうれ
くの時や山より落るるの音
あいつの鳴り 毎夜尾上うれ
たはくもまわり しまを麻の聲
澄の音も川の流れたるあひの音
たふれや火を打たけぬあひの音
あひの音も川の流れたるあひの音
こえの音も川の流れたるあひの音

燈籠 麻の聲やまきりふるれ裏の山
心とれうよりまきり 燈籠うれ

菊 いくの音せ 宿もといひにまの音
山とれおひり ことひの音乃れ

秋夕 落るるやまきり 山とれの音
あひの音やまきり 山とれの音

掛箱 掛箱の音花むらうる日 かけ箱
こき箱の音ころもいふ老の音

萩 白萩やまきり 萩の音うれん
ゆりやまきり 萩の音うれん

芝川 扇や 峯 一羽を 羽り

初秋 や ちんちんを 志する 園の 窓

多子むきも 多ふこそ 初れを 秋の 秋

夕ぐれ の 風を つけり 一葉 落

茅棚 蟬鳴や 里乃 煙り 此本 一葉を

かきしりや 他村も ありし 又 煙

いづくも や 只さ ありよ 子よ かくれ

吾の 朝露の 帯 ぬるや 志の け

鶉 鶉鳴也 噫 乃 つゆも 奈し

長夜 隣て ハ 火打 ぬ あり 長夜 分

秋雨 けころ 此本と 少も くらせや 蟬の る

山田 けろ 多言し 秋の 何 免

推 の 実の ころれ けの し 古 城 法

かく 折りく 凡も ありぬるや 檀ふく

系凡 降るの 帯 纏りて 系 凡の 那

ちんちん 汲あけ 見れ 秋の ちんちん 柳

花 ちんちん 小ま くる 花 蔭の 園 法

初光 鳥 後 夕 父 戸の お せや ちんちん 光

秋虫 花を 消も 凡も 秋の ちんちん 光

秋蟬 一本の 葉を 碎 け け 蟬の 蟬

西風 月まゝくし又笑はるし 西風之那
 八朔やまことよ 稲の花を
 蕃椒 是も実も 秋を 庵うし
 茗紅葉 是も 藤を 紅葉
 唄 燈籠のきく 紅葉の
 竹の春 山のかさく 竹の
 秋の風 多ぶて 竹と 秋の風
 栗 庵栗や 是も 秋ほけ

夕鳥 夕鳥や 是も 見合は 月夜
 芭蕉 雨の日ハ 志あるを 芭蕉の那
 初秋 是も 秋ハ 今秋の秋
 秋蟬 古寺の 夜ふ 蟬 秋蟬
 長夜 長き夜や 虫の 声 長夜
 扇を 扇を 何と 扇を 扇
 朝音 朝音や 後 朝音
 杉系 杉系も 浮て 出 杉系
 花ハ 花も 送小 花 花
 萩 萩の 花 下 萩

葉山子 雨の日はとも照る日も葉の葉山子が
糸瓜 せふハ秋もあつた此の糸瓜うね
砧 音うらたれ 音ささえ 更へ 砧の音
秋海棠 砧のあつたれうらたれぬ色や秋海棠
尾 初尾や 暮よ入され 二日月
を川 雁や 禁林の 暮のうらたれ
燈籠 位引 一 暮のうらたれや 燈籠
梅の 夕うけよ 梅の葉もや 二度の 鳴
花や 三が白し 月夜の 文の 暮もや
鶉 暮のやや 花の ことく 鳴 鶉

葡萄 朝庭より 庭ると見せし 葡萄 柳
菊 日は白の 葉の 床し 菊の 暮
敗碧 飛中し 小目 たり ぬあつ おとこ 逸し
鳴子 ねおろく 暮 岐山田の 鳴子や
秋丸 秋 ねや 朝 庭の 暮 暮もや
秋葉入 暮 入や 暮 暮もや 小暮 暮
未拈 未 拈し 暮 暮の うねの 近き 水
前拈 迄 迄し 暮 暮の 暮 暮
糸瓜 垣ト 糸瓜の 暮 糸瓜の 暮
園痛 桐の 暮の 暮 桐子や 拈 園痛

待也 まりちやあうく窓の月明り
輝 霄月の内かくも輝くの如
墟^{キリクモ} ありくはさきか母老の一人位
秋の 色くの草よ是忍や秋の
傾入 後入や若くありて悲しあり
送火 送火や雨指さるれば衣を
燈籠 山寺の夕々れきき燈籠
白花^{後登} さまくれ色よ清くぬおとこし
葉山子 羽衣よ系流る場疎のわしし
二月 吹をれて木のらよまやや台の月

名月 名月やさきしおしは花こころ
あはれうらえは顔のそらるる
何やつの解のあやそ月今宵
我儘よ飲つくして今も此月
月今宵友のあきこのよま
月今宵つけてあおく野もせか
桂とよ常れあや月今宵
明月や何悠くと人通り
きりくも きのりくも鳴や丸舞の海を一夜
后月 後の月や山母に凡のお

萩

萩打て片一神 志なりぬれ小巻

糸ヲ秋よむし 志のまこし

白萩の 萩もうらぬ夕アうら

夕くれや じきたつや色の糸

やうの糸の 海一くれや虫の糸

くれとせぬくれをそくや 秋の塚

虫擇

よーあしれ糸も長や虫えくみ

鶉

鶉唱度よこしとく 地一のつ

蜻蛉

此こ流れ残るあつさや赤蜻蛉

尾

入月よそよく尾美の風情うら

花地

まのり一木志地のすくみさく

世のゆいおもひくせ 志地うれ

萩

萩枝よ 萩を花母よけ風情

白之萩や 一夜の 萩の あまふ

萩秋

萩秋や 命ふもまのり 萩小舟

萩秋や 明早もこ 萩草の萩

花地

萩糸ハちるうり 志る志地うれ

角紙

信時の社も 萩る角紙うら

萩糸

萩のいろけ糸よ 志糸鶉の萩

萩糸

萩糸うら 萩糸の 萩うら

麻

暮方をりて、高き程に、とくく麻の終
二日月に、其方より、ふりそ、一、其の音
麻の音、を、ハ、カ、と、せ、れ、こ、を、し、
山、高、く、登、る、一、麻、の、音、を、こ、
志、の、音、や、山、を、く、せ、れ、ハ、板、の、音
水、掛、草、只、こ、ろ、水、の、け、き、や、一、ト、志、つ、く
たく、つ、く、水、掛、草、の、音、く、う、ね、
桐、系、ゆ、く、と、凡、ん、あ、一、桐、の、音、と、其、音、
送、火、や、煙、と、あ、り、一、カ、キ、の、音、
出、築、う、る、カ、キ、の、音、の、こ、と、其、音、出、築、や、な、

橙

榴棗

牡丹

稲系

葡萄

秋草

た、い、く、れ、う、う、く、と、其、音、一、桐、
榴、う、る、や、葉、山、子、の、神、と、り、て、其、
家、あ、と、の、ろ、と、う、く、れ、て、其、音、の、花
色、あ、り、う、む、う、一、其、音、や、牡丹、の、花
よ、く、と、れ、ハ、其、音、と、あ、り、一、稲、の、系
ま、く、と、れ、し、の、ハ、の、色、の、音、と、其、音、の、終
者、川、の、一、人、あ、る、や、秋、の、音、れ
い、そ、う、一、く、せ、の、音、と、こ、ひ、め、一、秋、の、音、
桂、の、音、や、ゆ、の、音、用、一、其、音、秋、の、音、
尾、寺、の、音、と、其、音、の、音、一、秋、の、音、

石 衣うり神よも月をひきく夜への
花也 人軍りし川のそりり花也系
鴨 たえうれや門白とるる鴨の身
三日月 ちううる柳の葉なりこの月
虫 虫うりや七子の葉一トあしし
玉系 物しとのさあのし 世し 玉まうり
虫 虫の声くる一口よきうりりり
菊 大きく細やんはうりくよ明のさ
月石 新宅小居りこころやつこのさ
麻 月影のささうりふそし 麻のさ

未拈 未拈や月の出ゆも蔭あがり
葉山子 山細りたれう葉山子の枝もか
女名茶 梅り凡は人よこそあれ女名花
秋峯入 峯入や梅 紅葉とこのさし
秋坂 秋の坂やむらりまきり射抜
石 村やのきぬこよきる葉をうり
蔭 白をやえまれくせ川 系葉
世方 田も畑もいたれそえよし世方外
木城川 川をり凡のまれり木城川
未拈 未のれよるきんくと陰白うり

高き 境の野 色は青くけし 家のまゝし
早倉 早倉や たくまの 中の 夜もまが
葉山子 たゆの 風を しのびたる 風の けし
鳴子 月の 光を 照らす 鳴子の こと

百川發句集
冬これか

更衣 山くも雪の 雪や ころも
雪山ハ 雪よさうり けし 小海も
海花 山よさうり 山 雪よさうり けし
雪山ハ 雪よさうり けし 小海も

野火

定めを 雪よさうり けし 花
雪山ハ 雪よさうり けし 小海も

小春

たぐ 一日の 雪よさうり けし 小春の けし

雪を

山雪の うも 雪よさうり けし 小春の けし

袴

雪山ハ 雪よさうり けし 小春の けし

風

風や 雪よさうり けし 小春の けし

雪

雪山ハ 雪よさうり けし 小春の けし

雪

雪山ハ 雪よさうり けし 小春の けし

き
こころしや喜の小川も次々し
山位の憐れよ埋むきつね

時雨
舟を呼ぶもせしきと久志く
舟川のきれ義母し夕し

旅廓して旅人ありまきくわ
世のわいきふものよ夕し

日初や出でいそつくはるの
埋火やふのさつちまき

埋火
いづこ火やあつめあるる
埋火やあつめあるる

うはこ火やあつめあるる
埋火やあつめあるる

埋火やあつめあるる
埋火やあつめあるる

埋火やあつめあるる
埋火やあつめあるる

埋火やあつめあるる
埋火やあつめあるる

埋火やあつめあるる
埋火やあつめあるる

志よんりりと勢田沢人や今日の雪
 雪の船何一むられ居けしり
 七川もや茶よりおしきえるの上
 今朝見れば白木を井や夜の雪
 激つふよ雪のたけのふりう那
 ちのれをいと知あせたるこりうが
 人志くも喜の台をのしもの妻
 妙業や日は向ふとまいつゆれそ
 何れ故も千きもましき雪吹うれ
 一早起あましくうしきまのこりうが

氷

霜

雪吹

霜 雪

霜の業やうまへさくふの上
 雪の船ふくれりむらぶら
 みる雪よさの雪もあま
 雪の船さの山え日の雪り
 大雪やこいよ雪の居居
 まんくし所よきあうねの雪
 ニニス入雨たれちるい少粒か
 滝煮のぬしきこいゆり那
 初業や煙るよめる雪根の上
 是月のさしつけ夜もあまん



一節の藝も其し其しのあるは
 氷 谷川のいろくませて少くも那
 穀 下をきり彼らうきしあられは
 蒼雨 野に括し山又白し冬のも
 氷 多きも前りの細く少くも那
 高少 穀とも多しと指のつち氷
 氷 とも梅を結つとあたる少くも那
 新たれも四六八片くのあうが
 荒磯のまきて少く抱とあふを
 氷 水水場よ塩ふと足して少くも那

おもきのもき先こそつるをくら飲うれ
 板橋の一面もともきくら飲うれ
 冬の雨 雪とまの橋と初り利のる
 氷 花一りのしふきけあし初少
 箱 方くは園の彼、窓まのま
 穀 ありは厚ききや木梢よ氷のき
 雪吹 白、雪のま一文字のを吹う那
 少 美しき美のさうは氷う那
 雪雪 ありきや他もよこらぬあの色
 窓角をぬく多ききやあつた

おきや 春よはまのまほつれ
おとや 春よはまのまほつれ 水の音
はくくと 千鳥の音やとまら舟
浪風と一むれすを 故平 春
浪音もあつく 夏や 浮 森 春
春よ 秋の志まらふ 春よ ぬくあを
春一羽 雪の吹のや 山 冬 春
水鳥や 鳩ふちむ 羽つく 浪
浪のあち 沖風をこす 鯨つ 春
あ 春や 春の 春よ 春よ 春

春一羽 嵐すり 春 雪のまら
春日月の入時 春 春 春
夕風のあち 春よ 春よ 春
時よ 春 浦の 春よ 春よ 春
白くと 小田の 春よ 春よ 春
春よ 春よ 春よ 春よ 春よ 春
春よ 春よ 春よ 春よ 春よ 春
春よ 春よ 春よ 春よ 春よ 春
春よ 春よ 春よ 春よ 春よ 春
春よ 春よ 春よ 春よ 春よ 春

栂 庭のくる月や栂の物もこま
炭室 もこのやや 寝る山の木の上
猿ハ 猿ハや 隈を月も松の上
らうちやや 瘦け山の新より
栂柳 吹ちれて二日の月やうれ柳
冬栂 凍る雪や 雪のやある栂の花
梅も雪のやうらや 梅も雪
風白ふ石ころあつた雪ころ柳
降る雪のうらさのさむさうれ
ろくきや 老の栂も定より

蒲室 山をたぐむたぐぬ蒲室が
山茶花や 鈴り父日をちり
さくん花や 雪もまある茶師堂
ゆらん茶や 茶の木とつれまぬ柳
冬の日や あふあふ雪もさくも
里柳 一村いさよふ多し里柳
柳 隠る雪のさくくや 柳もさ
櫓火 やれ定よ月うちをさ櫓火
雪 雪もさくさある茶の
雪 雪もさくさある茶の
雪 雪もさくさある茶の

きこえやあめあけのあし
炭のぬやあそりのあそひのあそひ
楷火 たしあそひのあそひ
薄雲 旅あそひのあそひ
冬霧 舟あそひのあそひ
友のあそひのあそひ
舟あそひのあそひ
山あそひのあそひ
一あそひのあそひ

冬木立 まる家ハよの夜屋住や室の梅
花あそひし雪をよこえて梅も花
ハの川道人ふいのをて冬木立

冬木立 志んくと二日の月や冬木立
野社の名井新ふし冬木立

麦飯や人の志くく山のを
むすまのや凡ハ隣りのさく一吹

冬木立 冬木立のあそひのあそひ
冬木立のあそひのあそひ

冬木立 冬木立のあそひのあそひ
冬木立のあそひのあそひ

冬木立 冬木立のあそひのあそひ
冬木立のあそひのあそひ

炭の匂や栂の深きうきもあけり
まごのまやまごのわらうきもあけり
山との更り夜もやうは 少
雪の夜をたふすいあけり 納豆け
川倉のそわらうきもあけり 栂の枝
吹雪小波うのあきや 栂御
猿ハやぬくとそたる雪の山
ろふをうきやまもき古紙を
ゆふりや鷹り山の影と利
とぬけきく火燧よまぐハ十夜は
十夜

栂御
通路のさんけ新しも十夜は
見くうきも親きまき栂御のそわ
一里塚をうきりたよりや 栂御原
うきくと臨味まき道や 栂御原
山との清や栂御原のまき
後一里塚をうきりたよりや 栂御原
松原の日のまきうきもあけり
まき小栂御のまきもあけり
月うけもまき小似るる栂御のまき
まきハ早吹ちまきうきもあけり

夜神楽 夜神楽や木の音よさらし月の影
水仙 垣一トま透通りうき水仙茶
破まじり母家原あきの水仙を
あき一トまきしよきよ水仙茶
ナギ 荒浪やナギ花も夕浦し
細豆 け まき声や一人をくひて細豆け
枇杷 ちくちく我の元は ちくちく枇杷の茶
茶花 茶のむや畑のほききの教つて
冬魚 山寺の善の煙りや冬魚の
き菊 うん菊やつふよ菊の一ト茶

き念 一ふの氷もとけうん念佛
芭蕉 芭蕉馬やちまよ唐のうえ茶
山茶花 山茶花や老も日紅の茶の小を
時 松竹や一人時をく一里塚
栞地 くれの月栞地の未小のころ那
葛栞 葛栞く山路の風のものをこし
櫛火 櫛の火はけ 嘆き丸いのちう那
川 川 川 餅や下きれ厚少
冬川 冬川や小喜西のあし

陽春 只見せや今まういふうきり茶
 小春 山寺の滝もきりけ小春の那
 夏前 麦前や村の店屋の隠居老人
 水仙 唐室のあれなる唐や水仙 美
 枇杷 ちひても又よし 枇杷の花さうり
 茶花 茶の美や 細小春の日れ小春
 奴 よき友のん命たるこたううぬ
 更して頼りり小なる物おもん
 以中 約下訪してぬ日和や 神路中
 建之 建之忌や 吹ちよし たる唐系山

持少 ちんく 冬夜は山寺の滝少
 少 花は流るる 小春の那
 室梅 まく其ハをくちのし室の梅
 川 是くぬ 鏡日ありかき川
 網 一ツ四の 端や 急をいし海
 時子 時雨や まく 依りれ 月の夕
 家 福も 縁の思ひや 小夜時雨
 今 是れ 星の おきさや 一ト志くれ
 少 谷水の木の葉まちりや 神 少
 冬地 霜をて 何々 尖き冬をせう那

栞也 七三とよめる凡の行末也 栞也 京
冬木立 冬木立 柘も 朽れたる 古 社
栞 ちんくと 栞也 栞と 月の新
干巻 彼も 栞の 子て 栞 栞 干巻
栞舟 小 浪の ちんく 栞 栞
ちんく 栞 栞の 干巻 栞 栞 栞
又 栞 栞 栞の 仕度 栞 栞 栞
細豆 栞川 栞 栞の 栞 栞 栞 栞
栞 栞 栞 栞の 道 栞 栞 栞 栞
冬月 栞 栞 栞 栞と 栞の 月

き 栞 栞の 栞を 栞ある 栞 栞 栞
舟 栞 栞 栞の 栞の 栞 栞 栞 栞
栞 栞 水 小く 栞の つら 栞 栞 栞
栞 栞 栞 栞の 栞 栞 栞 栞 栞
栞 栞 栞 栞の 栞 栞 栞 栞 栞
栞 栞 栞 栞の 栞 栞 栞 栞 栞
冬月 栞 栞の 栞 栞 栞 栞 栞 栞
栞 栞 栞 栞の 栞 栞 栞 栞 栞
栞 栞 栞 栞の 栞 栞 栞 栞 栞
栞 栞 栞 栞の 栞 栞 栞 栞 栞

片は水く 澄ハゆめり水六ツの美
一 夜く 舞れ志く水のたる水 家
少 以く 免く 砂も女も少く 那
埋火 埋火や 家も命ハ月 欠
兼書 終年や 燈籠よる水との 澄の光
立そりや 年く水作の 音 飾
兼本ハ水水さいし 電のあちりうさ
珠 金もよれくき草や 年の波
そく 掃や 世ハ志くうくと 鳴うん
あく 掃や 昔小うりる 凡 呂上り

四季

東都

今日菴

元夢

春の根のあるものいそがし

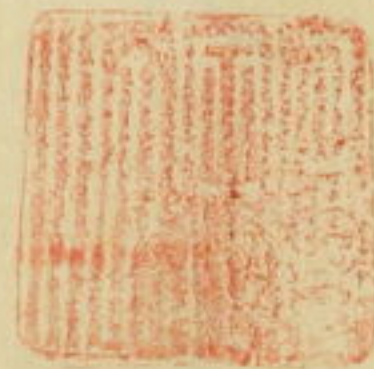
暑あらし雲よくせり 利ほくきま
あらしや 四か欠伸るま 川の風
梢も合点く 心も 庭もあつ那

天明二壬寅春三月

東都今日菴社中

永日庵

百川



百川狂歌集

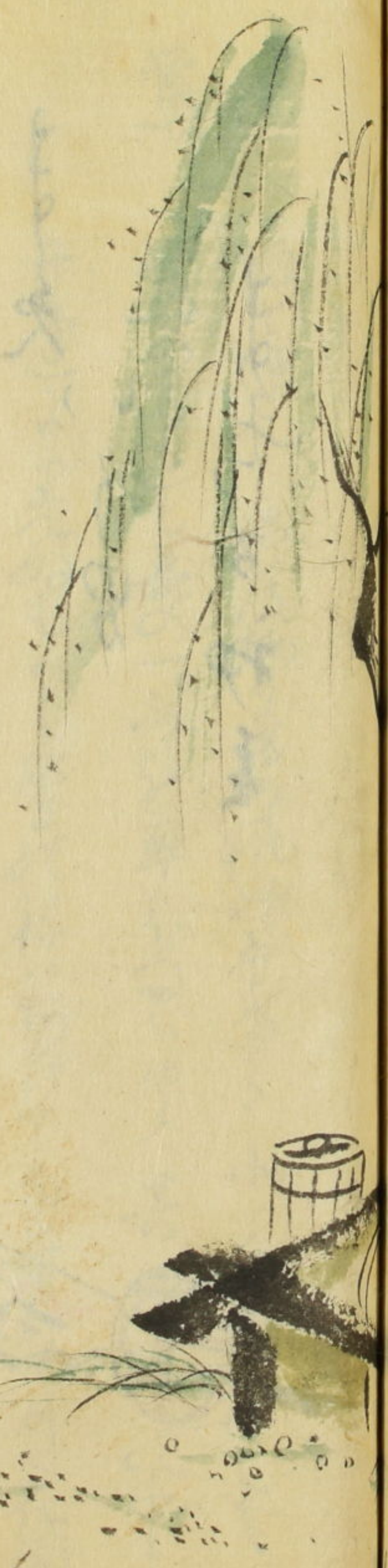
春姓部

^{何處} 善春
 夕 姓
 辰 色
 逢 日
 苗 代
 春 子

おろし帆小並辰も出来て大添春のおそ此はのはしり
 千町の田小二名の夕姓声のこそりの身まり川
 去年よりし少の口も解そめて辰をそそと唱姓う那
 善うしそ今日もちうしれ提小春の日さの一は小たつ
 春しそやば元暇さぬれとそさきハ立てるある苗代
 緋をより春さハえ條出て二三日う春子のいろ
 春子のそちやうしれる小金原日は小春も一方二分ふと

梅 寫

木の糸糸又葉とけぬい真の根のくく久も花も
十色の喜のしめらん雪の祢をけけてふ赤紅を以て
梅よき庭の内に梅の枝をてはほしく白くころの那
去尺をわけて見れば袖小白もつまる梅の大木
山麓りと鼻をとはせる梅のうらまひてきよは雲の風
笑出て自由自在の梅のそよふえよほりゆめり
喜のよた一枝と幸玉の目とをわたりて送る梅の音
梅の歌のをう木とあはる庭のうらまひとあはる梅の枝
雪の唱喜ゆめい笑の白い袖とてまらぬ梅の音
そよくと風の福茶とやをくせぬ梅のうらまひの雲の梅の音



ほろり

枝ハ物々

川のくま

のを

梅



風小ちもむとまのまの毛纏小けくまを今ねあつてふせん

苗代

苗代のころもきふう川ぬを今ねよるがや川にぬの小田

暮道のまきふあつて苗代の水とぬたき夫の小山田

海層

畑ちの日毎小進一層をぬらにけじつてあつてぬ

浦波のこりたの帆舟を越えてぬる二層のぬ

はくちりし比斗れ剣のぬうり比く来て比えぬ層

逢つてまきふてかえ市此のかけて層をぬえぬぬ

きじよ雪すいまうらるる場をさくぬる馬金

鹿

ぬるまもきけし中を二子山今ねぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬらたる今ねぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

美山

海の月のぬ夢といんえて美鹿くまのぬぬぬぬぬぬぬぬ

美れぬ冬の花ぬの音ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

雛

花のほろちかき色一組に初生き村のぬ入のぬひか

きりくふう面をかき振舞うぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

立ちふふ子の雛ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

柳

喜れよとまらして條を青柳の系をさう出を山川のぬ

池水小うらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

聖の道小ちるぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

修き 水桶の今朝の月のつとを小てる未きく見し水に面あり

毒のこも実の序子のこよはせりよよある其のをいさ

浦能 思ふとせし浦の丸也し雪きて冷やく煙りたるまあり

大忍の山石の舟の岸の海のおもてふ家りたるあり

歎 春もたやと日さるる子願れぬいとありく人も持てぬ

栞 小塔の今下をたゆむを徒白服多てふにれこは

はれくるるうよをいにて栞とてをもよこつ色ふ

四五人の世いたつたれぬを山雲の申よに相見いとく

世栞 世栞は出をををかり世言とてうてはあふはつる弁者

逢日 酒小をひ茶ようさるて喜のぬれ居りおきたるうも

うもた

款冬 朝露小このをやまへ山吹の花さきる井おの玉こり

喜凡 山くはりくいなまうの秘ふはひおし多た喜のゆあり

喜阿 喜きぬとあるは衣れ也あけの海のおもてもをれくも

喜月 月影のさきや通る多秘のちあり関しむを喜れ夜

系栞 静さか穴の口傘のちふ似てちとく小わらやうか系阿

野栞 桂ゆり碎て屏よれ大鼓持たきおじてる友やも

四ふ今うさけあつく一世言ふと手煙りしたては具形

真川 沢をむるやの川小う世給やまの流しきぶらーなる

年礼 年礼小山家の入の父言ふ帰鳩羽織着て川りきし

松 せいあふは去年のちりりなまうむく川うさきく栞たは

角田川堤の茶をの尾せおき初雪や毒乃上客
 白魚 みるみるきりして一斗おろつたのむとやさん白魚
 万葉のゆいあきえいしもの古敷うらときのせいりき
 春を さあよさしとしとれる桜をよそ吹きたれんか
 初雪 しまり唄羽根つく中よさけのむつり男まき初雪
 春を 朝白き日本堤の藤を花床をねん本しよさし是れ
 桜 なりてしあも枝折のきせしよのうらむこの桜ならん
 初雪 春のいと雪と雨とをきあふなくみほせたる七叶のうら
 春雪 春未ても山吹あかく薄雪も青もあはれふさふさ出る人
 暮日 拾遺書ややくれ晴る春のさしれうら冬れ一日返る

春を 吉野山ふしとれ里あ花の照あうらる雪とこゆん
 梅 十全の春とちえんの花娘の命をねもころる梅のき
 春雨 花佛のうれ小猿は居ればききて淋し朝のきさる
 柳 水鶏うと夕夜をうら春の凡水門なく柳四五本
 柳 とまう舟米も桶ふつとあやな小猿りたてる青柳
 茶子んせのあきうら大の茶屋つくりて捲く門の春柳
 とこの肩の琴十三を柳をね凡のふさふさそめけん
 青柳の枝も雪解の川流も水も春の字のあはれさ
 梅着ふ今衣束も青柳のさるらんや隅田川 凡
 雪解て春もぬるしけいけいささる青柳の髪

春の月合せ鏡のさそ姫柳の髪をさゆりけり
風小なまうけたる厚氷をこころ解る春の昔柳
風今もあうぬ雨あう糸の伸し門乃も柳
角田川は春の舟の煙子の火うけ煙をたてて
春の月合せ鏡のさそ姫柳の髪をさゆりけり
風小なまうけたる厚氷をこころ解る春の昔柳
風今もあうぬ雨あう糸の伸し門乃も柳
角田川は春の舟の煙子の火うけ煙をたてて

百川狂歌集

夏の部

時鳥

了れしてけり此中よきりて清よなる野
青さしふるるる夏は杜宇うぬも昔なる今の一
初茶子市のさやけの時を二口あうとくさうて
鯉はる舟は入り野公まう初ものさやけるる
にたふより茶と猪細の杜鰲あむけしえ一今の
車坂のちるとゆの杜宇却小あさん秋も人とし
谷そこ夏より初子観たさまうさう小くさひてそ
古寺の障もさるれ蜀鬼うら小くく峰の横を

玉簪のふりかざりて都公老の海を小舟をこりて
 崎を谷の小川の杜鰐竿一本の玉の代士
 是よりまう海に此の稲川を流るる目ふしや
 長面と引かきまの暮をこりては昔の神小まのせて
 空の海にまうるまのさるる所をたててのうかき
 下流小島を流るる海の羽もまきとある衣を此處
 着小島の海も海のまもまなるるまの
 谷川の水小くせりて教とあり卯木の花の雪解とを
 美の地の卵をまきとせしてある程と傳へし物
 峯はまきた下とて知るまのま白くやのさるる

向崎

そら

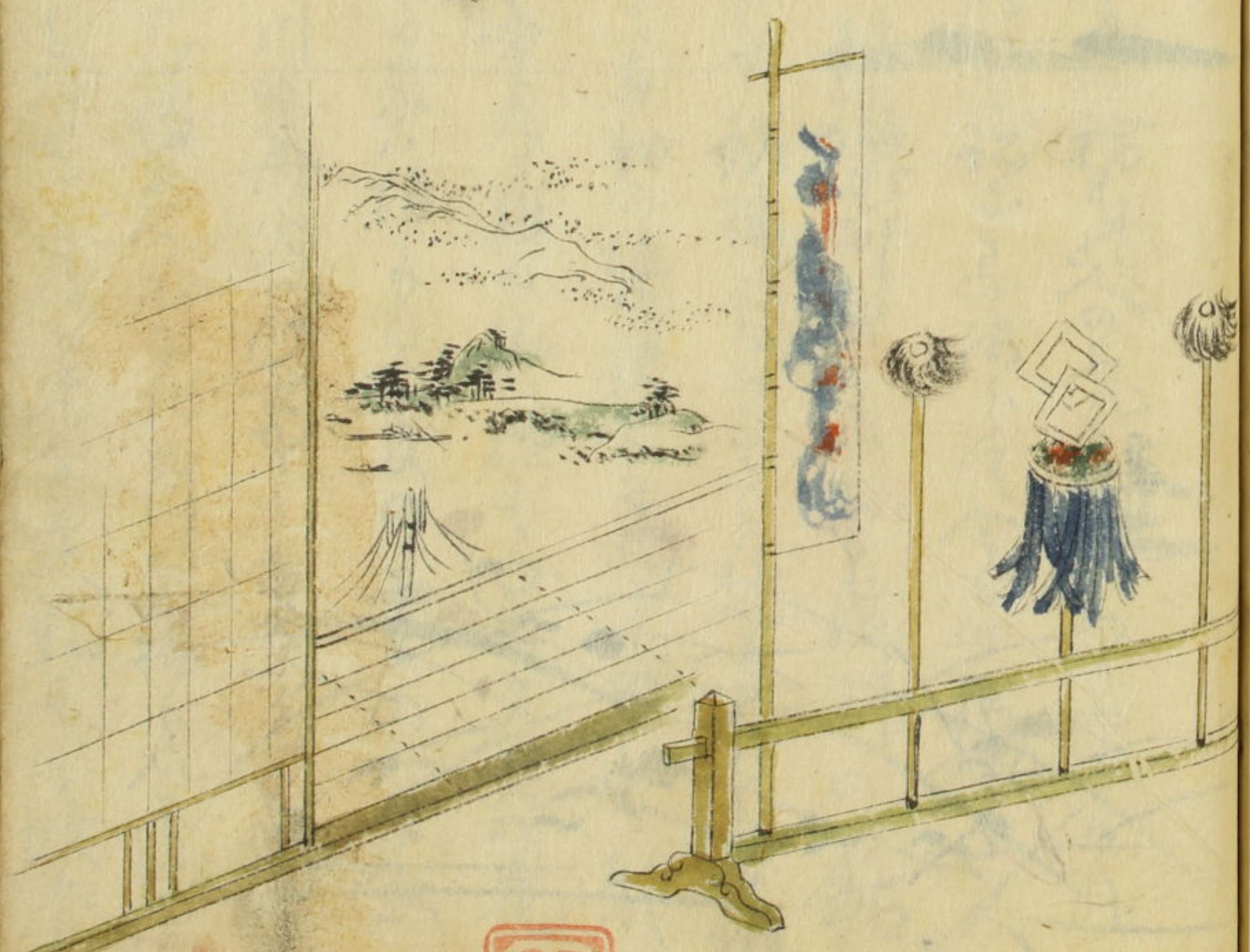
家

のり

解

河

川



夢子

ふゆのふゆいひの

ふゆいひの

あつゝいひの

こゝろ

のつゆたり



更衣

社あつゝいひの仕立の袴も此人の元来もろくやせり

艀

冬の手とさつちをぬすゆふきの油は今の袴もろく

艀

十三里ふゆいひの艀桶も此のまゝは信川の艀

魚

蓋とれいまいふくと艀桶はたうもを移すと名ある若袴

魚

かきももつちまる白さあ袖の垣の袂をまゝしゆりゆり

魚

改まら火をいふくあてたる艀の家は煙も白し夕白の花

魚

区(以卯)もも候艀の家は垣も二交の雪の夕白

魚

信川のあつゝいひの美信川の舟火は世やある書を照せ

魚

五月のあつゝいひの信川のふゆいひの川を移るをば

魚

夏月のあつゝいひの信川の涼く月も老をそん乳もる故屋

魚

夏月のあつゝいひの信川の涼く月も老をそん乳もる故屋

五月 五ノある本を引しを枕う家小祓てのこくも五月る此に
猫ももう入るくは月早夜をもし何のほし火串さした山
蟬 一里塚立場の茶屋のそくめいふうつさいさ夕蟬の歌
麦畑 人ものよぬ道なきなり申分て行くじ
根つねもろせ施もあふれは辻堂の故抱斗物夕小なら
五月 五月のふつりそくあうのこ十童子もち小侍くあり
父三小がきつづけてはて又あはしくあは夜手は山
かつととりて

かつととりて 麦秋田極く下田うらむは水きハ
先二

時鳥 せをけてふろく金小旅人ののうたをるとははかうもこの
旅舟りてゆやねの都云それ初冬もをうまふて
いふまでもあうこくをこれいふ夜まるちの山郭云
そくえん舟送りみ小を扇あじめきれは風のあきつれ
扇 一人旅うまをれるやと鬼のやうあるを物小つら
夏旅 大原木小片心う米をうきまき部のかくさ成りり
五月 青の麓居の早ともまきあけて涼しき月小秋を思をうま
蟬 夕まのそく指し清蟬の羽袖も音をいふをえせん
喜のひやけあきある地色の松刀をいりて蟬の鳴えん
網涼 昼の湯とるじたぐいの水小又うまは次入れてさまも夕風

青月 月とふれはふりし日のまもはまれ竹志ありちるる福の昔雨
 葛蒲酒 うちそそふ流るる内の水にけりまむむ娘にせり籠の毛
 木下園 陽陰の系をくひてけり木下園溜りぬけてもあそそ乃
 夏菊 うち水れ涼しき庭ふ夏菊のいさううてそ白夕夕月
 餘花 山ふのこ花も秋もあそ秋のこくぬあうてうん
 牡丹 けてあそ家とひはるも秋下りぬへー庭のむ細
 端午 白きる今ふちるるあそ小園の醒とあそそ川
 父立 花の後にたてはふ佐の門にちまけあそそさしる夕立
 山萩 ころしてもうき世の凡のあそそたつねてある庭の涼し
 涼萩 松風の吹く空あそそ山位も茶水のきもたえそ涼し

百川狂歌集

秋乃部

七夕 亭午ぬ織女とくと見そ人のをるもまれば早合の空
 晴るる二夜をうか霧の梅あそそしき早入るるそそ
 七夕の二夜をるとのせりとあそそいあうてそぼもあそそき
 此二夜ころけてまらしういしあそあそれうそに早合の夜
 月 涼し今をいさひもときあけて月の光りり少る水銀
 秋の家も今をいさひもときあけて月の光りり少る水銀
 生れたる今をいさひの月が秋あそそをうてそ老つるそそ

夕暮ふあき暑も山の端よはふそとつと日月のこのち

月と見ら田中の里ここのうよくゆるりかよあきよもる

あ涼のあきたそよもあきあき月二方のあひめたよあき

研ぬきし今宵のあきあきあきあき他月の水うら

穢織のあきあきあきあき西陳の里

秋もあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

元山のいしあきあきあきあきあきあきあきあきあき

秋夕 山雲のあきあきあきあきあきあきあきあきあき

百のあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

紅葉

秋山や色

新雨よ

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあきあきあき



松

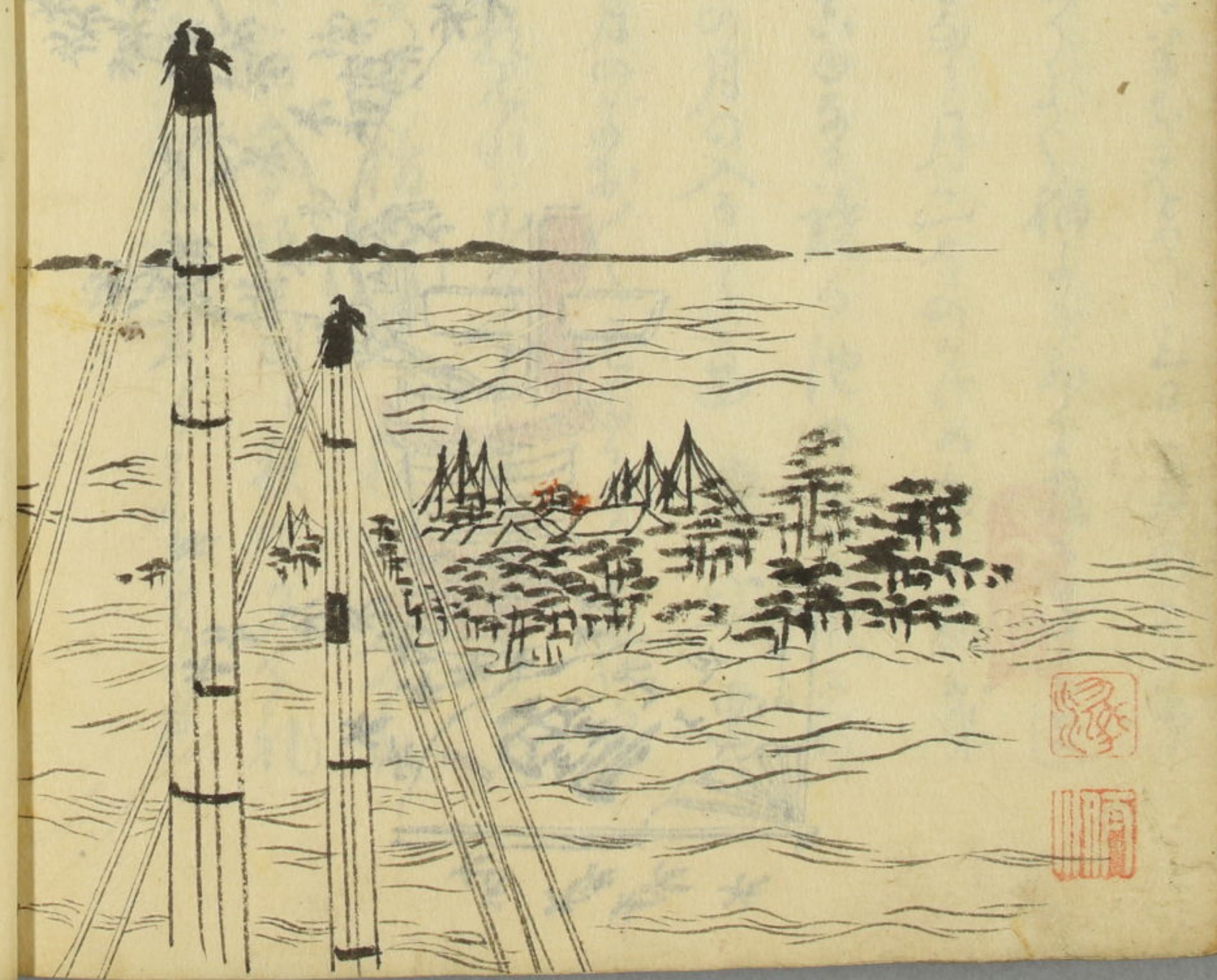
ふかき松

舟

あゝの松

はな

はな



このまゝのうらまゝあまの山は松の葉はし紅葉をのり
朝夕のつゆぬ露のひらまても海は紅葉とまじりて
草摺の影もあはれの原は紅葉とばしてうらまゝ
妹は松のうらまゝあはれはるる夜もあはれはるる
味酒のうらまゝの山は松の葉はし紅葉とまじりて
ねむのうらまゝのうらまゝ十所田は松の葉はし紅葉とまじりて
夜もあはれはるる夜もあはれはるる夜もあはれはるる
小山も二百十日あはれはるるのうらまゝのうらまゝ
麻のうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
うらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ

出来秋

秋歎

麻

高 今秋の秋月の夜をせよと云ふ小まのくおけるまのまの白は
 稲妻 稲荷山に鳴く相把指つま乃をれまくれをもおりくおん
 残暑 庭小く水もぬるちもをり見ももくくおかく日の入り
 旁 漆入の若る舟も雄客乃中おハけて今秋の来ふ
 紅葉 花の吹雲と御しをゆ日照くつちが秋の紅葉を
 麻 夜もまのくおる麻の角よりも笑あまもれ夜も
 十三夜 二の夕のまも夕十三夜すて史料小むさくおの月
 七夕 ことれまも同一との短冊のり色をかり早まも白
 稲妻 戸隠の山に今宵もまよのりまよと告るやまれ稲妻
 牡丹花 いくおとまのくおるよまよれとこりれまもまれぬる中

秋野 け原のまをふくさとま城の野ををけむ秋の秋のま
 川 赤糸 吉野川下流くよ紅葉をれうれが飯もまひて下路
 秋花 しまうことれまもまよて冬のまれぬまもまよる秋のま
 秋虫 秋の虫もまよりころお桐のまの糸く落ふとまよる白
 海 松坂ハ小岩の大島てんく小まてハ海小まろか町ま
 葎 吉野山まよとまよる紅葉の樹入おくハ十本まよし
 新酒 東山たのちまのけは坪ハ小まままよる葎
 石山 月山おとにまよとて白妙や碎てあまめく新酒のソ
 秋月 石山も徳のふさまよまよ白小ままよる出ま月のまよの秋

梅小舞る父を竹も初雪のりおきてえんものしわもえい
 水鳥のたつて志をめて記ふなる氷のうえよ月のふくふし
 木の葉のさかもしおる原ふさふさ落て鏡老山の冬の夜の月
 石山麓の光やゆきまると雪をかげり出したる月のさくらん
 冬の月より静かに白妙ふちうせうなく夜もこころあや
 十鳥 春ませしおふ翠の立ちる原風の浦の小原子なるわ
 なみちとて鳴ゆるあふはのあまをせぬ雪の海系
 里神 東 里神奈あふうのうき原あふ木の葉の風もたちさかくこ
 冬村 雪をおとをふをうしけいりさこいれし——子科百44
 埋火 あく、海を今るれあてぬくあまをさしやうに埋火のしと

春まへせ

梅小舞る

たちさかくこ

水鳥のたつて

小原

十鳥



或蔵持ハ

きししぬぬの

詠めた

ふりふれろ

雪の

心持



梅炭夜の光といふは輝ふるさふいけぬ埋火

とあふよ家のまきと埋火乃と小社むけを引くを夜

町雨 往利よまふた酒の夕時をむとたけふくうとぬぐまみ

村やのありく雪う境うくくもりえまくりあるあり

冬山 夜の雪木の枝くおれろこ社を見あくる板倉の山

古郷 雪 生れたるとこは木管れ雪の中うりりえる十之峠

雪 赤野地まき乳色の詠めた心のふれる雪の明ふれ

霜 地糸の帯帛よりし今軽又つた小たて 霜花の那

伏見 雪 雪るくた伏見の里の具作しきふしく小あきく軽お

妙菊 妙ころ指もけせぬ花雪のまへ菊のまやけいふし

後景 ぬきとせ紅葉ちりへて田んぼのいもがうらやまある
 時雨 たつとや井戸を揚ぐ小村雨うらやまあは入あすあは
 十鳥 ありつとまをうつ籠の隙ふらうう屏風の浦ふさうう那
 敷 次込しせんの上のうらやまあはあは面分の今りれあま
 高野 下すいともやうれあまの月小ゆるそふ風さのくそま
 稲 引きれー鳴子の細小徳をなふおとろくあはれいるつま
 夕月 武蔵野れ虫の老く耳小のうまれさのもたぐれ水の元
 冬月 乾あくあをさううてまよふふふまのめ床まの花
 冬山 虫のまもそのまの根を根をてけふあを月の上るてさ
 谷小 谷小はあまうらさそを籠の山本の葉をさくぬきのをけけ

十三夜 夜神楽の詠は十三夜のまよふ後あまのうらやまあは
 十夜 意はよ葉のうらやま十夜小いりやむ小はるやむのまよ
 冬枯 叶のまよれはくあまかあはてまらあままら 牧の又このれ
 雪 つらあて葉のたけもあはあまらあまらあまら 佐徳ちの雪
 葉系 あまあてまの尾のまよあまらあまらあまらあまらあまら
 葉 葉しすそはあまらあまらあまらあまらあまらあまらあまら

四三并歌集
 葉のまよ

百川狂歌集

恋の部

たえまをたう物の煙も浅草山ぼくにあぬおのいひが
こぬをたふくれてまぢまのいよおご人舞の床
はくち箱うらむ物の火おそかたう人をうちうらむが
今日をたうてさき秋風のをほくたはしをといひせし
ようそめてくとあといの毎ふれまかてをねたまにうらむ
うき恋ふ者の命をたなくおみのつこの口もせうこま
船々のちのふ初雁もきなまどうきやうらむをかのまん

恋

あんなをたふらむをたふらむをたふらむをたふらむ
五車さしゆめをたふらむをたふらむをたふらむを
ちり恋しそはしそふたうよあくがよらむをたふらむ

恋

白川のきぬ旅ゆふ一夜さもいれおねたる恋のこちのく
旅ゆれい忘色ぬみをけの飯の関の手紙ふえぬ恋一た
きろみよやたその命もさうねれて旅の日記ふらぬ恋中
草花家の命の九一夜まらふやうてもおのぬきこ
恋れあれはさきぬくの舟むらぬ恋ふらぬなる
けしたるるれ親言いのくを送りぬをさうもとも
まらふとおふ待まは山を尾上の陸れ嘆そく

公の臣我忠の能なる殿のやせてもその御事なむ
思ひ此松の葉を父部うへ吹をうへせて君をまつ
志のちんとしれとも人の目もなれうたのいかる祀の月の
人の口もつうたて(国)のたも(見)にせが二人持る松を
そいつらあのととのぬじめをさるとひめさるまゝぬあらし
そちあらしおのれうすも松もまよとたくのも思ひ(ふ)ま
むいとう我後の葉にちるむれた水もみのあうんつれあす
さうつそ袖ころもたのれいんせうくもりの(節)こえ
あれも又あめそととまゝぬまの門のたをさせと(思)ふ
忠厚しんを水母水海のしんをたすもたのすそくく(思)し

よめくとあめぬに若凡らく松葉のちる命と思ふ婦
まるといふ松は首ながく山鳥は尾上松の針の遠そくま
約束の時ううれ又二ツ君の心この針久おとつれ
新松をうすも松は此葉のくりにを思ひの君のしんを
まぬくの神をも松もあてふと君のううの我(思)はま
ま、松と松は松も松も松も松の玉のたまもあめ松は
松のまもあせともよ、松は松は松の松の松の松(思)
、松、松より松よりして松も松も松も松も松も松も松も
松を松松松の松の松の松の松の松の松の松の松の松の松
松も松松松の松の松の松の松の松の松の松の松の松の松

松一本たふし

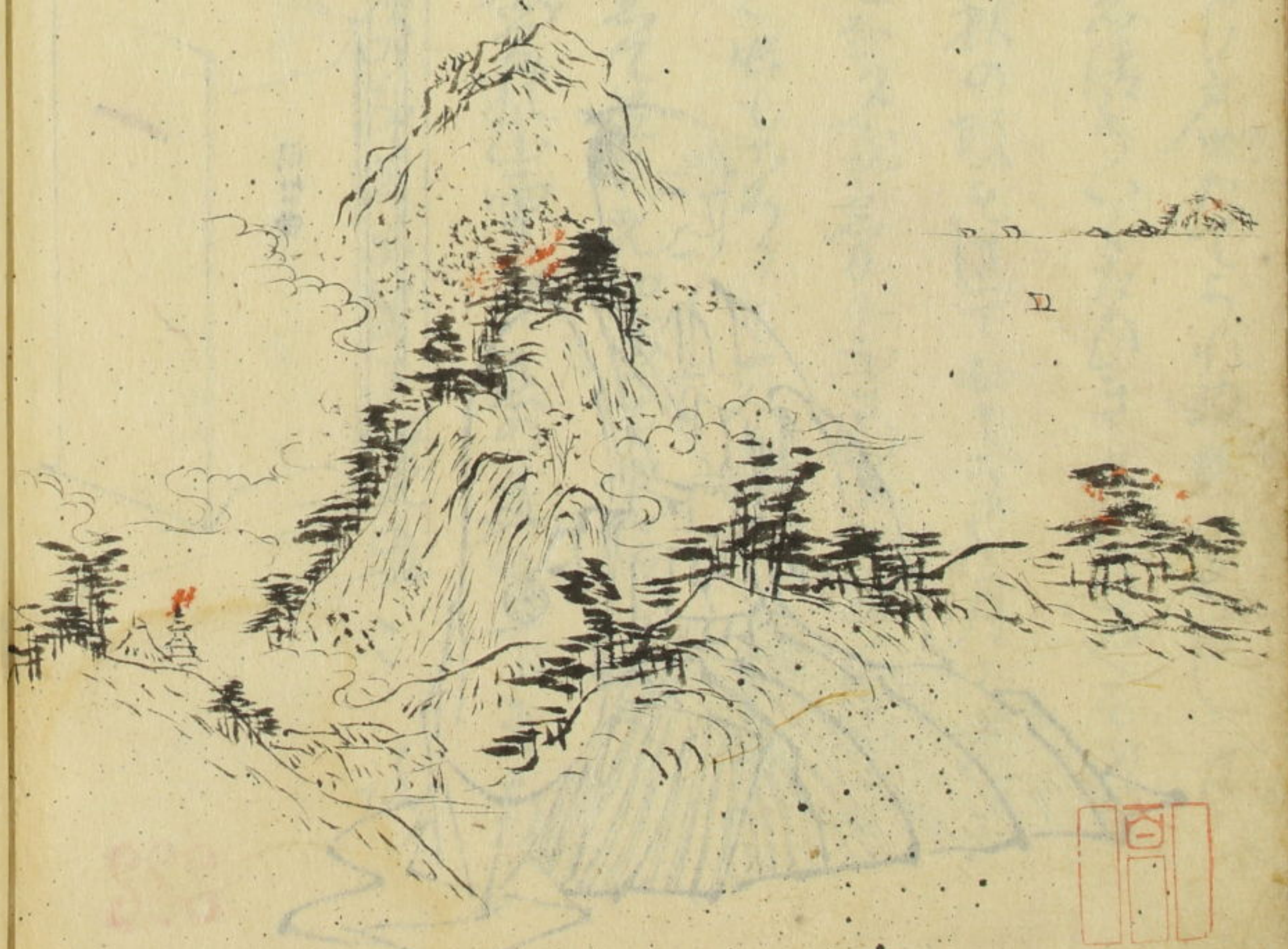
多れこの

雨ち〜れ

嵐のいろは

ふせく

柴れん



玉川狂言集

雑の部

市 賣買も三か令限ふらうそを織言言き初せ市人

笛 異作も海さふし此笛してを福ふふ代を止免てふくへ

傘傘下站 傘傘下站の西西 傘傘下站れりも雲らん助六の日和ふ捨し下站のう〜く

蛸通 万代も色かひじあう通し神のむきを登り中いむらほ

閑居 燈火が添てい〜る山室ふい志の猿の志そくの〜見お

古々 立もさうだつて是れ親里の志とも志れぬ竹の小雀

圃 むらが影はくきん雲流道に舞てい〜る玉さかひが

朝 出れ目小じろ六指乃くはてと煙りハ船る山のあさ飯
古寺 古寺の什物根枕印まきまきとん志義志くる印葉を枕也
旅者 箱枕申小あまや唐靴のつゝしのきや木置旅者肩
道草よしうせしあへん程乃
旅心とよかかん

煙火 風よりも松舟霍丁をほしし出枕よ縁こいみきうれあはれ
夜仕事舟系とる葉を二舟舟並も志ひまてもりそくせれ乃
四十二年れやく
あや〜〜〜れやく

田 風 登れまらせきやくとこのうもて〜と〜せしえんき曲水
いのもあそそく程のあし〜のふあおれもれこ
昔二年ハ二度も二度もつし田とらふらき田といふ人も

煙 隣えととあれ山家山人居てよるそとあま煙あつし
温泉 一ト海くや海いのあおそ湯あ〜の艾もき〜に安と〜え
浦 浪風ふるをまもるる袖の海吹く〜らせて村く〜を
楓 あま柱る内の水そ楓火のいく是るの岩をま〜くらん
葎 毎登れとの葎ハ貨物のと利をま〜くらん夜さく
藻 川の流や流もつえぬら色葉子を母あ〜る風のあ〜こ
桐 嫁入のちお小る桐の木けてや〜が〜ま〜れい〜と志
隣 申地をた〜い〜あ〜む〜し〜ま〜じ〜ろ〜の隣同士と
市 夢覚ふぬまら市の時相場株夫の翁のふ〜れとろ人
琴 七夕の渡りもあ〜ぬ本柱今宵の段〜ハ人〜り〜の〜り〜

瀧 麦米をこきりて時乃瀧の煮ちりとも庵に焼くのみ
 機 泣子に机よせありて織機はちほの糸はよふかきまる
 女 板仕事の家とて業は機女の焼きもほろ一もし
 抱女 定ちき流乃舟流うら女あちちちちうちやとさふん
 旅 登こゆる木曾路の旅の夕飯は梅小はうえる山く
 笑 風よりも松舟は路しそしり色このよ旅こひ小まりの
 ハ 燻文守細
 奉納の的なるまのまをふちたれ徳やま申の早
 父苦ハ舊城守身辻思の人をまよふけちやう成りり
 恋よりもつらあき縄の二めをおちるといふまゝかハさ

水 機の家小何さなく桶ツおきハことなる水ハ源山
 風 桐の木と柱に涼子ふあつ物おつけほくと息をつく
 犬 門をこゆる角太郎とちやあてんふとりし器乃釣犬
 狐 萩道とる人を迷はせ机の家をををこて火おや焚く
 天象 星いろの青も夜中もかくはれつううえき七曜の剣
 船 川の激ふから紅雲や子もち船さ利とちやう人のソク
 浅間の裾

浅君山卯月八日此神也人獄ハ火縄の煙たりの川
 詠訪の海
 机火のうらて後ハ詠訪の海遊て少のうを口たさふ

文政七申

冬月日

二十三日

重廣

京川 沈昌

去



栗原地蔵堂

川

